

Title	丁玲とその作品（一）
Author(s)	中川, 俊
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.69-p.80
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80370
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

丁玲とその作品（一）

中 川 俊

前 言

中国著名的女作家・丁玲（蔣冰之）在1907年生于湖南省临澧（Línli）県。她在「五四」以后的中国現代文学史上留下了一定的成績。

通过「革命文学」論战时期、魯迅所領導的「左連」时期、抗日战争时期、延安时期、解放以后的当代文学时期，以至于1967年反右派斗争中受到批評，失掉她的一个著名作家的地位为止，她的文学实践、她的生活經歷並不是平坦的。

現在中国正在进行偉大的文化大革命。在現在的眼光看来，我們可以說，丁玲虽然在民主革命时期文学上有某一定程度的进步作用，可是很可惜她不能过社会主义的关。

做为一个有才能的作家，一个进步的知识份子，丁玲为什么在民主革命时期得到比較大的成功，反而在社会主义革命时期遭到失敗、挫折了呢？这个原因何在？这是一个值得我們深思的問題。

文学和政治的关系問題，向来無論在哪个社会，在哪个国家，都是一个很难解決的問題。然而在中国1942年毛澤东「在延安文艺座談会上的講話」有系統地解決了这个問題，正确地指明了方向。

我們知道当时丁玲也参加过延安的文艺座談会，也实践过这个理論。但是，她还是終至于不能跟着中国人民一同前进。

文学和思想、文学和政治，这是一个很大的問題。我想，在这篇小論文里，从这些問題的角度上来解明丁玲和她的文学道路，以便回答上述的問題。

按照丁玲的經歷和文学发展的阶段，我認为可以分成以下五个时期。

1. 第一个时期（1907—1928）叛逆精神和妇女解放
2. 第二个时期（1929—1930）革命和恋愛
3. 第三个时期（1931—1936）苦斗的丁玲文学
4. 第四个时期（1937—1948）延安时代的丁玲
5. 第五个时期（1949—1958）社会主义和丁玲文学——丁玲批判

ま え が き

女流作家・丁玲の名が人たちの口に登らなくなって、すでに久しい。1957年から58年の反右派闘争で、丁玲、馮雪峰を糾弾した周揚、林黙涵グループの三十年代文芸路線は、1960年代後半に展開した文化大革命で崩壊し、中国革命は転変きわまりなく進展している。

この数十年來、中国にまきおこったはげしい闘争や論争は、また1919年の五四運動にまでさかのぼることができ、中国を根底からゆるがせた「五四」の思潮は、その後50年もの間、さまざま

の形で反応しつつ、その意味では「五四」は現代にまで生きており、また将来を指向するものとなっている。丁玲が生きた時代は「五四」から社会主義時代まで、まさに中国革命とともに歩んできた作家ということができる。

丁玲は「五四」の新しい思潮に育まれ、封建主義への反逆と近代精神の追求によって、記念碑的な文学を確立した。しかし社会主義時代において、その関門をくぐることに失敗し、社会主義文学の確立に挫折した。こゝではそうした成功と挫折の悲劇を、中国の近代文学史のなかであとづけ、作家・丁玲の歩んだ道とその作品について考えてみたいと思う。

丁玲文学にあらわれた成功と挫折、そこに織りなされた人間模様、「革命と恋愛」といったテーマに対する女性作家らしい対応、挫折に終わったけれども、革命という暴風雨のなかを生きた、スケールの大きなこの作家について、私は文学と政治の接点に照明をあてながら、追求してみたいと思う。

私は一応、丁玲文学の進んだ軌跡を、次のような時期区分によって、説明してみようと思う。この区分は、もちろん絶対的なものではないが、丁玲文学に即して、私はこのように区分するのが適当だと考える。

1. 第一期（1907—1928）叛逆精神と女性解放
2. 第二期（1929—1930）革命と恋愛
3. 第三期（1931—1936）苦闘する丁玲文学
4. 第四期（1937—1948）延安時代の丁玲
5. 第五期（1949—1958）社会主義と丁玲文学——丁玲批判

第一期（1907—1928）叛逆精神と女性解放

丁玲（Ding líng）は1907年、つまり、中華民国が成立（1911年）する直前、すなわち清朝末年に生まれた。それは中国が、ようやく2千年の封建時代を脱して、近代へと歩み出る変革の時代であった。

丁玲の生家は湖南省臨澧県の大地主で、本名を蔣緯文（Jiǎng-Wěiwén）といったが、父姓の蔣をなのらずに、母親の丁姓を用いて、丁冰之（Dīng-Bīngzhī）といった。というのは、丁玲は幼時に父を亡くし、母親の実家・常德（湖南省）で育ったからである。若くして未亡人になった丁玲の母は、母親としての自覚から、自分の貧しさの根源が、纏足にあること、纏足こそ女性の人間としてのあらゆる可能性を、退歩にしばりつけているものなのだと悟り、自然の足にもどすために、まきつけている長い布を解きはじめる。きつくしばっている布をゆるめた足は、纏足をはじめたばかりのときのような激痛で、立っていることもできない。その痛みに耐えながら、しばっている長い布を、少しずつ短く切って、解きゆるめてゆく①。そのような母親の新しい時代への理解、ひいては娘に対する理解と、さらに大地主の封建的な家庭のなかにあって、丁玲の幼い眼がひらかれていったことは否定できない。

1919年、丁玲は、長沙（湖南省の省都）の中学、当時は男子ばかりであったその中学を志望し、女子学生として、はじめて入学した。学友たちの間では、郭沫若の「女神」や胡適の「嘗詩集」（中国最初の口語詩集）が話題をさらっていたが、丁玲の興味は、むしろ、『民国日報』の附録版「覚悟」にあった。創刊された頃（1919年と推定されるが、その期日は未詳）の「覚悟」には社会主義的な傾向はなく、「女性解放と家庭改良」「男女平等と教育問題」など、多くは「自由・平等・博愛」といった民主主義思想であった。しかし、大量の訳文（山川菊栄「世界思潮の方向」など、主として日本人の著作）には、第一次世界大戦と、ロシア革命後の中国の知識人にみられた、資本主義に対する失望と、社会主義の道への願望が反映されていた。この雑誌は、1920年末には、明確にマルキシズムの立場をとり、1921年にかけて展開された、反マルキシズム思想との論争に参加し、とりわけ、アナーキズム批判がなされている。この雑誌の内容が、そのまゝ丁玲の精神内容であったわけではないが、当時の一般的インテリとおなじように、丁玲もまた、この雑誌に多くの共感をよせていったのだろう。

当時（1919年）、13才であった丁玲にとっては、「女性解放」や「自由恋愛」という新鮮なことは、少女の心をはずませたにちがいない。丁玲と比較的近い年令で、「五四」をむかえた作家には、謝冰心（1903—）、巴金（1904—）、趙樹理（1906—）たちがあげられる。さらに、一代前には、近いところからいえば、茅盾（1896—）、郁達夫（1896—1945）、毛沢東（1893—）、郭沫若（1892—）、胡適（1891—1962）、さらに魯迅（1881—1936）をあげることができ、魯迅、胡適の世代の人たちが、中国3千年来の伝統思想との対決を、その生活体験にもっていたことに比べ、丁玲の世代では、その成果としての近代主義を享受し、その立場から封建的なものへの叛逆の姿勢を示していた。

1921年、丁玲は上海に出て、平民女子学校に入ったが、この学校は、陳独秀らによって設立され、働きながら学ぶ（半工半読）という、当時としては、大へん新しい制度をとり入れていた。また「丁玲のように、深窓に育った叛逆女性が多く」②のちの作品「莎菲女士の日記」（1928）や「韋護」（1930）に登場する女性像のモデルになった王剣虹と知り合ったのもこの頃のことである。この年（14才）王剣虹とともに、南京に出て、「独立」「自由」の生活を試みたが、少女の理想は、現実によって裏ざられ、成功しなかった。丁玲は翌年、22年、上海大学の中国文学系（系は学科）に入り、一年ばかりこゝにいた。この学校は、「五卅」事件（1925）から高まった、反帝運動の推進に、指導的役割をはたし、また多くの革命的人才を育てたが、この頃の丁玲は、「政治にはあまり関心がないようで、思想としては、むしろ、アナーキズムに近かった。」③

文化界の新しい指導者たちは、五四運動（1919）を軸にして、新しい中国をうちたてるための大巾な近代化運動を推進し、この運動のなかで、「科学と民主」という西洋思想を主張し、伝統的な中国の倫理、習慣、文化、社会的・政治的制度を攻撃したのであるが、その他に、リベラリズム、プラグマチズム、アナーキズムなど種々様々な社会思想があつて、この運動に刺激をあたえていた。たとえば、23年頃、上海にいた巴金（Bājin）のペンネームが、バクーニンのBa（巴）

とクロボトキン(Kin (=jin, 金) からとられていたことは、よく知られている。巴金もまた、アナーキズムにひかれ、小資産階級の幻想と善意を表白した、独自の文学を創造し、近代文学のなかで、代表的な作家となったが、この時代には、アナーキスチックな思潮が、多くのインテリの心をとらえていたようである。

丁玲はこのように個人主義的、アナーキスチックな側面をもちながら、自我の確立、女性の解放を熱情的に追求したが、その行為としての現れは、丁玲が最初の作品である「夢珂」を書くより3年前、すなわち1924年に、北京で男友達の一人であった胡也頻と恋愛し、同居生活をはじめたことである。そして自由恋愛の実践者として、かなり自由で気まぐれな生活を送っていた。友人の作家沈從文は、当時のもようをつぎのようにつたえている。

「都会を離れて、西山の山の中にこもり、興のおもむくまゝに暮すというのが、彼らの最良と考える生活のあり方であった。」「彼らは興のおもむくところ、すべて創作のねうちがあると思い、興味や願望を大切にした。」「したがって書かれる中心は、自身の愛とか憎しみ、哀しみ、よろこびであって、社会性をもつことはできなかった。」④

「夢珂」が『小説月報』に発表(1927)されると、彼女の才能は文壇の注意をひき、新しく登場した女性作家・丁玲の名を印象づけた。

西陽の田舎から、上海に来て学ぶ女子学生、夢珂(Mèngkē)の名が題名になっているこの小説は、多分に少女小説風な感傷と幻想をふくんでいる。旧式の教師と口論して、学校を脱け出した夢珂は、豪奢でモダンな叔母の家庭の中にも安住できない。上品さ、応酬さ、おだやかさのなかにたゞよういいしれない虚しさと孤独、やがて、夢珂と従兄弟の恋が生まれ、従兄弟の乱れた私生活から、その虚偽に傷ついた少女は、家を出て映画女優になり、一躍スターになるが、名声のかげに、夢珂はやはり反撥し、それに懷疑するという筋である。「夢珂」は当時の若い丁玲の、青春の自画像であり、封建主義に反撥して、近代的自我の確立をめざしている作者の孤独、悲哀、苦悩、幻想、矛盾といった内面がよく表出されている。もっとも、作品としては、少女的な甘い感傷が基調になっていて、ひ弱いものとなっはいるけれども。

翌年1928年に発表された「莎菲女士の日記」は、丁玲の文壇の地位を確立した作品である。茅盾は当時、やはり新進の女流作家であった謝冰心と比較して、

「莎菲女士の日記」のなかにあらわされている作家・丁玲女士は、「五四」以来の時代の烙印を全身に負っている。謝冰心女士の作品の中心が、母の愛と自然に対する讃歌とみるならば、初期の丁玲の作品は、このような奥ゆかしさ、上品さとは、まったく無縁である。彼女の莎菲は時代の苦悶に傷ついた、若い女性の叛逆の絶叫である。莎菲女士は個人主義者であり、旧礼教の叛逆者である。」とのべて、丁玲文学の独自性と叛逆性をとり出している。

この小説は、莎菲という肺を病む、アパート住まいの若い女性が主人公になっているが、肺病のために、生命の短さを意識した女主人公という、ぎりぎりの場にまず自らを追い詰め、男女の愛情の問題を、大胆に追求したものである。

彼女は背が高く美しい華僑青年を熱愛し、その俗っぽさを軽蔑する。軽蔑しながら強くひかれてゆく恋愛の過程で、青年の魅惑的な唇にふれ、この青年をつきはなして、自らの主体性を確立しようとする。こうした複雑な心理を、日記体で書きつゞり、適確に表現するには、相当に尖鋭な感覚と表現技術が必要である。もちろん、こうしたことには、彼女が愛読していたフローベルの「ボヴァリー夫人」、デュマの「椿姫」など西欧文学の影響も考えられるが、たしかにこの作品は、五四以後の解放された女性の、微妙な恋愛心理を、たくみに描いている。また封建時代から解放されたばかりの当時の女性作家としては、まことに大胆な描写でもあった。そして最後に莎菲は、「こっそりと生き、こっそりと死んでゆこう。可愛そうな莎菲よ！」とつぶやく。読者はそこで、孤独と感傷と虚無感のほか何もないことを知らされる。こうして、近代的自我を追求する方向は、深めれば深めるほど孤独、焦燥、プチブル的幻想がいろ濃くあらわれ、その極点は1929年の「自殺日記」にみられる。そこでは凡ゆる価値というものに、意味をみとめられなくなり、唯一の休息は、死ぬことでしかなくなっている。

ところで、五四の新文化運動の最も大きな推進力となったのは、学生や青年であったが、意識面で指導的な役割をはたしたのは、新しい思想集団を形成していた教授やジャーナリストなどの知識人であった。しかし、この運動がしだいに政治の次元に移ってゆくと、自由主義者は情熱を失うか、政治活動から遠ざかり、新文化運動は内部で分裂し、五四の思想は崩壊してゆく。そうした1926年前後の上海文壇は、寥々としていて、文学雑誌では、『小説月報』の外に、創造社の新しい機関誌がある程度で、その『創造月刊』も半年近くとだえたりする。新人作家丁玲の名が文壇に登りはじめたのは、ちょうどこのような時期であり、丁玲文学は、こうした土壌のうえに叛逆と自我の芽を出したのである。

第二期（1929—30）革命と恋愛

第一次国内革命戦争（1924年1月—27年4月）の失敗と武漢政府の崩壊は、知識人にあらためて近代中国社会の本質、中国革命のありかたについて、根本的な再検討をせまり、中国は歴史の大きな曲り角にさしかかっていた。

このような1927年、広東にいた魯迅は、上海に移ったが、前後して郁達夫も南方から、茅盾は牯嶺から、丁玲、胡也頻、沈從文らは北京から上海へと移り、さらに当時の文芸界では右翼を代表していた現代評論派の拠点が上海へ移され、プロレタリア文学を主張する太陽社が結成されるなど、上海文壇は、にわかに活気を呈し文壇の中心となっていった。それは革命の挫折がもたらした文芸の盛況といえるのかもしれない。

創造社の郭沫若は、これよりさきに「革命と文学」（1926）を書いて、芸術至上主義からプロレタリア文学（「革命文学」）へ創造社の転換を宣言していたが、こうした急激なプロレタリア文学への傾斜は、さらにさかのぼれば、「五卅」事件（1925）が契機となっていたと考えられる。このことについて、麥克昂のペンネームで書かれた郭沫若の「文学革命の回顧」⑥（1930.1.26）

によれば、

「中国のブルジョアジーは、外来資本主義の束縛のもとに育ったので、十分な成長をとげることができず、したがってブルジョア革命は奇型の革命であった。これに反比例して、中国の労働階級は日ましに勢力をつよめている。このような中国社会は、プロレタリア文芸発生の絶好の基盤となるであろう。」とのべている。この唯物史観にたった見解は、1930年代としては、まことに大胆、明快なものであった。

しかし創造社グループは、全体として、大へん強い政治意識をもち、北代（1926）にも参加したが、革命の失敗（1927）によって、ふたたび文壇にもどると、革命文学論の矛先を、単純に、代表的な既成作家として令名のあった魯迅や茅盾にむけるという、濃厚なセクト主義があり、革命に対しても、ロマンチックな情熱、プチブル的幻想をもっていた。当時の文芸界では、マルクス理論の紹介、あるいはそれにもとづく作品の紹介は、まだほとんどみられず、「コーヒーを飲みながら、^⑤自分だけは無産階級の意識を把握している。私こそ真の無産者だ。という革命文学者」^⑥と魯迅がいったように、観念的傾向が強く、理論と実際の裏づけが十分でなかった。それは「文芸をもって階級闘争の武器とするからではなくて、階級闘争をかりて、文芸の武器としている」^⑦からであり、「文芸が階級闘争という援護の下によりかかっている」^⑧ので、文学そのものにあまり力を入れなくてもよく、またその「内容形式ともに無産の気風はなかったので、スローガンを用いなければ、彼らの^⑨新興、の^⑩新興、たる所以を示すことができなかったからであって、プロレタリア文学ではない。」^⑪むしろ「文学と闘争との関係は稀薄になってしまっている」^⑫いた。

そこで魯迅がプレハーノフ、ルナチャルスキー、蔵原惟人などの著書を翻訳し、理論と実際面から、創造社の提唱していた「革命文学」に、実質をあたえていったのであるが、魯迅のプロレタリア文芸理論の中国への紹介が、梁実秋^⑬ら新月派グループの反撥をひきおこし、新月派も論争に参加してゆく。このことが左翼的作家の統一をうながし、文学史的には、1930年左翼作家連盟の成立をむかえることになる。

以上が、1928年、前後の上海を中心とした文芸情況の概観であるが、この時期を「中国左翼文芸の啓蒙時代」とする李何林^⑭のみ方があり、左翼文芸の啓蒙工作という点では、創造社が「革命文学」を提唱したことは、中国の近代文学に、ひとつの転機をもたらすことにはなった。1927年の革命の挫折によって、幻滅し、動揺し、なお道を求めていた青年たちの間に、熱度の高い「革命文学」の叫びは、たちまち共感をよび、「革命文学」という旗のもとに、広汎に、雑多な主義主張の人たちが集り、また、にわかにプロレタリア文学擁護の立場に豹変したという批評家もふくめて、時代の流行のように「革命文学」はさかんになっていった。

このような情況の中で、1928年上海に来た丁玲、胡也頻は、沈從文とともに、「紅黒社」というグループをつくり、『紅黒半月刊』を編集発行し、翌年29年には、『紅黒叢書』を刊行、また光華書局から小説集『自殺日記』を出版するなど、活躍がめだっているが、この文学雑誌の出版

は、間もなく持続できなくなり、生活も苦しくなっていた。長篇「韋護」(1930)、「一九三〇年春上海」(1930)などの作品は、こうしたなかで書きつがれたのであるが、こゝで丁玲文学において、「革命と恋愛」がテーマとして登場してくる。

作品「韋護」では、女主人公・麗嘉が、題名になっている韋護(Wéihù)という共産黨員を愛し、同棲するが、恋人の仕事がいそがしく、二人の愛情が、さまたげられることに不満をもち、韋護はまた、恋愛が知らず知らずのうちに、党活動のさまたげになっていることに気づき、決然と恋愛の方を捨てようとする。このとき、麗嘉は、はじめてめざめ、彼女も革命への参加を決意する、というのがこの作品のあらすじで、「革命と恋愛」というテーマは、このように、かなり公式的ではあるが、丁玲文学のなかにとりこまれ、革命が恋愛に勝利するという結末をあたえている。

「一九三〇年春上海」では、書齋にばかりとじこもっている小ブルジョア作家の妻が、狭い枠のなかの生活に耐えられなくなり、家庭を捨て、革命運動に参加してゆくという筋である。妻である美琳が、温和で甘い家庭を出てゆくところは、イプセンのノラ(この作品は、胡適によって、すでに紹介されていた)に似ているが、革命活動への参加の決意は、「なぜだかわからないけれど、生活にどうもはりがない」という表白が動機なのであって、政治的認識があいまいであり、革命もとってつけたように実感に乏しい。

当時の丁玲は、思想的にも実践の面においても、この作品の女主人公と同様に、「革命」ということへの認識は、深くはなかったのであろう。「革命」ということへの漠然とした指向が、彼女のもっとも得意とする、恋愛の問題と結びついたのにすぎなかったのではないかと私は思う。当時、胡也頻は「モスクワへ行け」(「到莫斯科去」)などのような革命的な作品を書いていたが、丁玲は、胡也頻のことを、^⑧左翼小児病。だといって、彼の作品を、あまり好まなかったようであった。丁玲は、革命と文学は別個のものだと考え、一種のヒロイズムから、革命に参加するか、文学で名をあげるか、どちらかだと考え、丁玲自身は、創作に自信をもっていたので、積極的に「革命」には傾かなかった。しかし、「革命」については、胡也頻よりもよく知っており、革命に接近しているつもりでいたと述べている。

丁玲文学における「革命と恋愛」というテーマの内容が、このようであったとしても、このテーマの設定は、やはり丁玲文学にとって、社会や政治という新しい視点を、文学内部にもちこむこととなった。このことは、丁玲文学の形成過程からみれば、やはり重要な契機であったとみななければならない。また、丁玲自身この頃のことを述懐して、

「プチブル的な幻想のために、革命の隊伍からも遠去かり、孤独の怒りと、もがきと、苦痛のなかに入りこんでいた。」^⑨とのべているが、こうした孤独と苦悩のなかから、時代を把握しようとする意図、ないしは意識が、のちの「田家冲」、「水」などの作品に、しだいに明確にたちあらわれてくる。

1930年、胡也頻は失敗した雑誌の借金を返済するために、済南(山東省)の高級中学へ赴任し

だが、学校で、マルクス主義やプロレタリア文学を宣伝したために、学校当局や軍関係の眼がひかり、危険がせまったので、5月にはもう上海に戻ってきた。上海では、この年の2月に、左翼作家連盟（以下左連と略称）が成立していたが、二人ともに「左連」に参加し、胡也頻は、その主要なメンバーの一人となって（左連執行委員、工農兵文学委員会主席）党の地下組織とも連絡をもち、実際活動にも従事していた。この年の長沙コミューンの失敗より、江西のソビエト地区は、蔣介石軍の重囲を受け、34年10月、ついに、瑞金（江西省）を放棄して、2万5千華里の長征に、のぼらざるを得ない局面をむかえるが、文化面での弾圧も、ようやく過酷をきわめ、3月2日、上海の中華芸術大学で、秘密のうちに結成された「左連」は、その成立時より、壮絶な状況に直面していた。

胡也頻は、活動のあい間をみて、長篇「光明はわれらの前にあり」（「光明在我們的前面」）を書きあげたが、1931年1月、国民党政府によって逮捕され、他の革命作家たち（徐殷夫、李偉森、趙柔石、馮鏗）とともに、2月、南京の竜華で銃殺された。胡也頻が、獄中で書いた最後の手紙は、2月7日付になっており、これは銃殺される直前のことである。その手紙は、「若い母さんへ」^⑩ という書き出しではじまり、「牢獄の生活は苦痛ではないこと、他の同志と話し合うことができ、創作の意欲にもえていること、それで原稿用紙をたくさん届けてほしい。投降はしないから、もう二、三年は牢獄ですごさねばならないけれども、将来のために、けっしてむだにはすごさない。まだ若いのだから。」そして丁玲には、「『左連』を離れてはいけない。彼らにびったりついていること、赤ん坊を郷里にあずけ、寂しいだろうけれども、創作にうちこんで、充実した生活を送ってほしい。」と書きつゞり、「将来のために、一時の困難に耐えるように」はげまし、「若い父より」と結ばれていた。処刑されるべきその日、夜の暗黒が刻々迫っていることを、少しも予知せずにかかれたこの手紙は、美しい理想と希望をもって、なお生きようとする、若い生命の鼓動をつたえている。丁玲は、胡也頻のこの激励の手紙を続いで慟哭した。

「……私はこの手紙から、彼の一生を思い返し、彼の勇猛さ、彼の堅固さ、彼の情熱、彼の没我精神を思った。彼は力にみちた人であった。彼は生涯追求し、障害にぶつかり、多くの苦難をうけ、ようやく真理をさがしあてて、共産黨員になった。彼は光明の大道を歩み出したが、暗やみから圧迫の手がのびて、彼をとらえ、彼が生きつゞけることを許さなかった。私はほんとうに彼のために悲しみ、このように年若く有為な人のために悲しんだ。私は自分をおさえることができないで慟哭した。これは彼が捕われてから流した最初の涙であり、とどめるすべもなかった。」
「私は復讐するのだ！ 可愛想な也頻のために、彼とともに殉難した烈士のために、私は涙をぬぐって立ち上った。」^⑪

この文章は、20年後の1950年に書かれたものであり、したがって当時の心境としては、かなり整理されていると思われるが、彼の死をひとつの意味として受けとめた丁玲の暗黒の支配権力に対する回答は、

「彼が自分の筆で、自分の血で、私たちのためにきり開いてくれた光明の道を、私たちは彼の

血を追って前進するのだ。」「二十年来、私は一ときとして彼を忘れたことがない。私の事業は彼の事業である。彼の肉体は死んだ。しかし彼の理想は生きている。彼の理想はすなわち人民の理想である。彼の事業はすなわち人民の革命事業である。」ということであった。

丁玲のこのような受難は、中国の歴史の発展途上の、ひとつの象徴であるように思える。ひとりのインテリとして、また一個の作家としての丁玲の気持は、痛いようにわれわれにもつたわてくるものがある。しかしこのような感情、またこのような意思が、客観的には中国近代史のなかで、どこまで貫徹しうるものであったのだろうか。後の丁玲の転向問題と、上にみられたような昂揚した感情、意思とを比べると、私たちは一つの懷疑をいだかざるを得ない側面にぶつかるのである。インテリの挫折や弱さを、私たちは一つの暗い点としてみ出さざるをえない。もちろん私は、このことをとりあげて、丁玲を責めるつもりは毛頭ない。たゞ私は、歴史のはげしい流れの中を、ドラマチカルに生き、悲劇的な命運をたどった一人の女流作家を客観的に考えてみたいと思うのである。

さて「革命と恋愛」という文学上のテーマは、まさに丁玲の実人生のなかに、血のしたゝるような形で、生きねばならぬ運命として立ちあらわれたのである。このような運命と文学との出会いは、丁玲文学をさらに前進させる契機となった。さきに述べたように、丁玲文学の前進は、その内に、それとは逆の挫折としてあらわれるような暗い点をはらんでいたことを、こゝで一応指摘しておこう。

第三期（1931—36）苦闘する丁玲文学

丁玲は胡也頻の死のすぐ前に生れた赤ん坊を、遺言にしたがって、郷里（湖南省）の母にあずけると、胡也頻にかわって「左連」の常務委員となり、雑誌『北斗』（「左連」機関誌）の主編を担当し、かたわら「田家冲」「水」「ある夜」（「某夜」）などの一連の作品がこの時期に書かれている。

「田家冲」（1931）では、地主の娘が黒いゆたかな髪をすっぱり切って、断髪に、粗末なみなりで農村にあらわれる。この地主の娘は、実は黨員になって活動したゝめに、家族や周囲の人たちから危険視され、彼女がかつて幼い頃、すごしたことのあつた田舎の小作農の家にあずけられ、監視されていたのである。しかし彼女は監視されながらも、農村工作をつゞけて、監視している人たちにすら、革命の事業を理解させるようになるという筋だてである。「田家冲」には、「莎菲女士」にみられた大胆な描写や、幻想的、感傷的色彩は消えている。がしかし、革命がインテリ——地主の娘——の立場から観念的にとりこまれており、また地主の娘が、革命の道に成長してゆく過程が描かれていないために、ロマンチックな色彩をまぬがれない。インテリと中国革命という重い意味をもつ課題が、この当時は丁玲にかぎらず、一般の知識人にとっても、まだ明確な形をとって意識にのぼっていなかったと思われる。丁玲はこの頃農村を好んで書くようになっていたが、丁玲の愛した農村は、過去の比較的安定した農村であつたし、そのうえ、丁玲のその

ような農村に対する感情は、「一種の中農意識にすぎなかった」^⑥ とのちにのべているように、農民を、その息吹きが感ぜられるほどに、描ききることは、この頃の丁玲には、まだ十分ではなかった。

中篇小説「水」(1931)は、この年、中国の16省を襲った洪水のために、土地を失った農民が暴動化してゆく過程を描いている。前半は、堤防が決潰する寸前の恐怖、水とのたゞかいが力強い筆致で描かれ、後半は、ついに決潰して、災民化した一大群衆が、被災をまぬがれた隣村や隣県をめざして移動してゆく場面が展開する。彼らにあたえられたものは、一握りの糠と、とうもろこし、それから、なだめの言葉と銃口であった。城外にしめ出され飢えた群衆は、やがて他の被災地から流れてきた災民でふくれ上る。水がひき、太陽が照りつけると、飢餓の上に、さらに疫病が、追いうちをかけるように蔓延する。城内では、洪水、飢饉によって穀類は高騰し、穀倉は固く閉ざされてしまい、城外には、飢餓と疫病のために、死線をさまよう一大群衆がいた。災民たちは抗議と請願をつづけるなかで、役人の欺瞞をさとりはじめ、真実を理解し、力を結集して、男も女も、洪水よりもたけだけしく、町へなだれこんでゆくというところで終わっている。この作品の新しさは、一人、二人の主人公の動きや、個人の心理を追うのではなく、集体の動き——農民の群像を描いている点にある。また洪水という社会性のあるテーマを設定して、階級闘争を描いているこの小説の斬新さは、北斗の誌上で、「新しい小説の誕生」^⑦ とまで馮雪峰に賞讃された。丁玲自身のべているところによると、「水」の創作に入るまで、「何カ月もの間、筆をおいて、模索をつづけた」時期があり、ようやく「莎菲女士」の作風をのりこえ、「水」において新しい作風を確立し得たといえる。こうして丁玲文学は「革命と恋愛」から、さらに「水」へと発展をつづけ、「水」の主題、作風はその後の「多事の秋」(「多事之秋」未完)「母親」などの作品を経て、1947年の「太陽は桑乾河を照す」(「太阳照在桑干河上」)につながってゆくと考えられる。

「ある夜」(「某夜」1932)は、ある冬の夜、死刑が執行されるその場を描いた短篇で、きわめて緊張した作品である。これはおそらく胡也頻が犠牲となった事件とかかわっているのであろう。「空はいつになれば明けるのであろうか」という終末のことばは、丁玲の内奥からの悲痛、孤独のつぶやきともとれるが、とぎすまされた神経は、はっきりと憎しみの対象をとらえていて、その怒りや悲しみは、孤独のなかに沈みこんでゆくのではなく、ますます広く根深く普遍化してゆく。この作品は、憎悪、恐れ、悲痛の象徴主義的な芸術化がおこなわれている点で、「水」系列の作品とは異なっている。

長篇「母親」は、こうした体験のうちに書きすゝめられた。この作品の時代背景は、清末から辛亥革命(1911)まで、古い時代の女性が、どのように封建的な重囲に苦しみ、たたかいつつ生きてきたかという過程を、丁玲自身の母親をモデルにして描いている。丁玲は、もともと辛亥革命から、第一次国内革命戦争(1924—27)の時代までの、大きな構想をえがいていたが、出版物の弾圧と、丁玲自身の逮捕によって、それは果されなかった。

この頃（1933）の「左連」の活動は、国民党の空前の弾圧のもとで、日に日に縮小し、「左連」結成当時の「半合法」から「半非合法」へ、「半非合法」から完全な「非合法」の存在となり、1932年には、「左連」の出版物は、すべて禁止された。この時期の「左連」について、馮雪峰は、

『「左連」は、政治闘争の一翼としての、一般大衆の革命団体である。』したがって「一般大衆を基盤として、政治闘争を完成するためには、文学闘争と思想闘争を通じてなされなければならなかった。」しかし「左連」の果すべきこの役割は、完全に無視されていて、当時、茅盾の「真夜中」（『子夜』1932）、丁玲の「水」（1931）などのすぐれた作品が、書かれているにもかかわらず、『「左連」の全時期を通じて、創作活動は、ほとんど無視されていた。』^⑩と述べて、「左連」の指導上の欠陥を指摘している。しかし、馮雪峰は後に、1957年の反右派闘争で、批判をうけて失脚し、その後になると、1930年以来、文化界の主流をしめていた周揚の文芸路線が、60年代で崩壊するという、歴史的な激動をいくたびか経て、中国の現代文学は、つねに政治とむかいあい、中国の作家は、転変きわまりない政治と文学との接点で、まさに血と泥にまみれて、新しい文学の道をきりひらいてゆかねばならなかった。当時、魯迅は、『申報』の「自由談」でたたかっていたが、なかでも、1933年の空前の弾圧のもとでの孤立したたゞかい（瞿秋白は34年初めに、馮雪峰は33年末に、「左連」をひき、瑞金に去っている。）はもっとも壮絶なものであり、魯迅の50をこえる筆名は、その検閲のきびしさをよく物語っている。国民党は、いくども魯迅を逮捕しようとしたが、逮捕しなかった。のちには魯迅を暗殺しようとして、ブラックリストに入れたが、暗殺もしなかった。「おそらく、そのあとの処置に困ったのだろう。」^⑪1933年には、「左連」はわずか数人の捕えられず、殺されなかった作家と党員が維持するだけとなっていた。」^⑫

そのような5月のある日、丁玲もついに逮捕されて、その後の消息を絶ってしまった。ある人たちは、丁玲をいたんで、「丁玲記念文集」を出版するなどしたが、その丁玲は、1936年、忽然と、延安に姿をあらわしている。行方不明になってから、3年の月日が流れているが、この3年の間の事情について、丁玲自身もすべてを語っていないので、事実は明確でない。しかし、南京で監禁されているとき、「丁玲を売った馮達（かつてスメドレーの秘書）と同居を強いられていた、ということ、丁玲が語っている」^⑬ので、そのような環境を脱出して、北京、西安を経て、延安にたどりついたことが判明している。1933年の南京でのことが、58年の丁玲批判のときとありあげられ、丁玲が「国民党に自首し」「共産党と労働者階級を裏切った」^⑭として、丁玲の変節が批判された。がしかし、のちの文化大革命のなかで、あきらかにされた36年当時の情況は、北方局の総書記として、地下工作进行を指導していたのは、劉少奇であった。彭真、薄一波、宋子文、楊獻珍、劉瀾濤ら重だった幹部は、つぎつぎ国民党に捕えられており、劉少奇は、彼らに擬装転向をすゝめたということである。（67年の劉少奇批判による）そこで薄一波、楊獻珍、彭真は転向し、一部のものは国民党の官吏になっていたという。官吏になるとき、名をかえているが、薄一波が閻錫山（山西軍閥）のもとで、官位にいたこともあきらかになった。こうした情況のなかで考えれば、丁玲の転向問題や、そのことを指弾した周揚を頭とする1930年代文芸路線は、また

別な観点から論じられなければならないだろう。

ともあれ、前節でもすこしふれたように、胡也頻の死を契機として、革命にむかって昂揚した丁玲の精神が、この転向問題を通して、その初期の作品にみられたような個人主義——下降の精神をあらわしてきたことに、私たちは気づくのである。昂揚と下降の精神的矛盾を、丁玲がどのように統一してゆくのか、この矛盾がはたして統一されるのか、または矛盾をどこまで、どのように統一させていったのか、このことが、つぎの段階で、あきらかにしたい課題となって、私の前に浮かびあがってくる。いうまでもなく、1957年の丁玲批判という事件からみれば、その帰結は現在あきらかであるけれども、その精神の過程を私なりにたどってみたいと思う。紙面の都合で第三期までについて書いた。第四期以降は次号に発表する予定である。

註

- ① 丁玲「母親」1931—1933執筆、第一部は辛亥革命が背景となっている。もともと、丁玲は母と娘二代にわたって書きすすむ構想をもっていたが、中断され第一部のみで終わっている。
- ② 茅盾「女作家・丁玲」（『中国論壇』第2巻7号、1933年6月）（『茅盾評論集』東京都立大学人文学部中国文学研究室編第2集）P.84。
- ③ 同上書P.85。
- ④ 沈从文「記丁玲」（『良友文学丛书』）1933年12月、1939年7月補校、P.76。
- ⑤ 麦克昂（郭沫若）「文学革命之回顧」1930.1.26（『文艺講座』1巻、神州国光社）P.81。
- ⑥ 鲁迅「文学的階級性」1928年8月10日（『三閑集』）P.100。
- ⑦～⑩ 鲁迅「硬訳、与『文学的階級性、』」1930年（『二心集』）P.167。
- ⑪ 文芸批評家、ハーバード大学で文学を専攻し、帰国後は北京大学、復旦大学の教授を歴任し、シェークスピアの翻訳がある。
- ⑫ 李何林「近二十年中国文艺思潮論」1939年（生活書店）P.167。
- ⑬ 丁玲「一个真实人的一生」1950年11月15日（『胡也頻选集』）P.15。
- ⑭⑮ 同上書、P.29～30。
- ⑯ 丁玲「我的創作生活」1933年4月（『丁玲代表作选』上海全球书店）P.346。
- ⑰ 何丹仁（馮雪峰）「关于新的小説的誕生——評丁玲的『水』」（『北斗』第2巻1期、1932年1月20日）P.235
- ⑱～⑳ 馮雪峰「回憶魯迅」1952年、「魯迅回想」鹿地亘他訳、ハト書店、P.62。
- ㉑ 桧山久雄「延安時代の丁玲とその文学」（『近代中国の思想と文学』東京大学文学部中国文学研究室編、1967年7月）P.328。
- ㉒ 周揚「文艺战线上的一场大辯論」（『文艺报』1958、第5期）